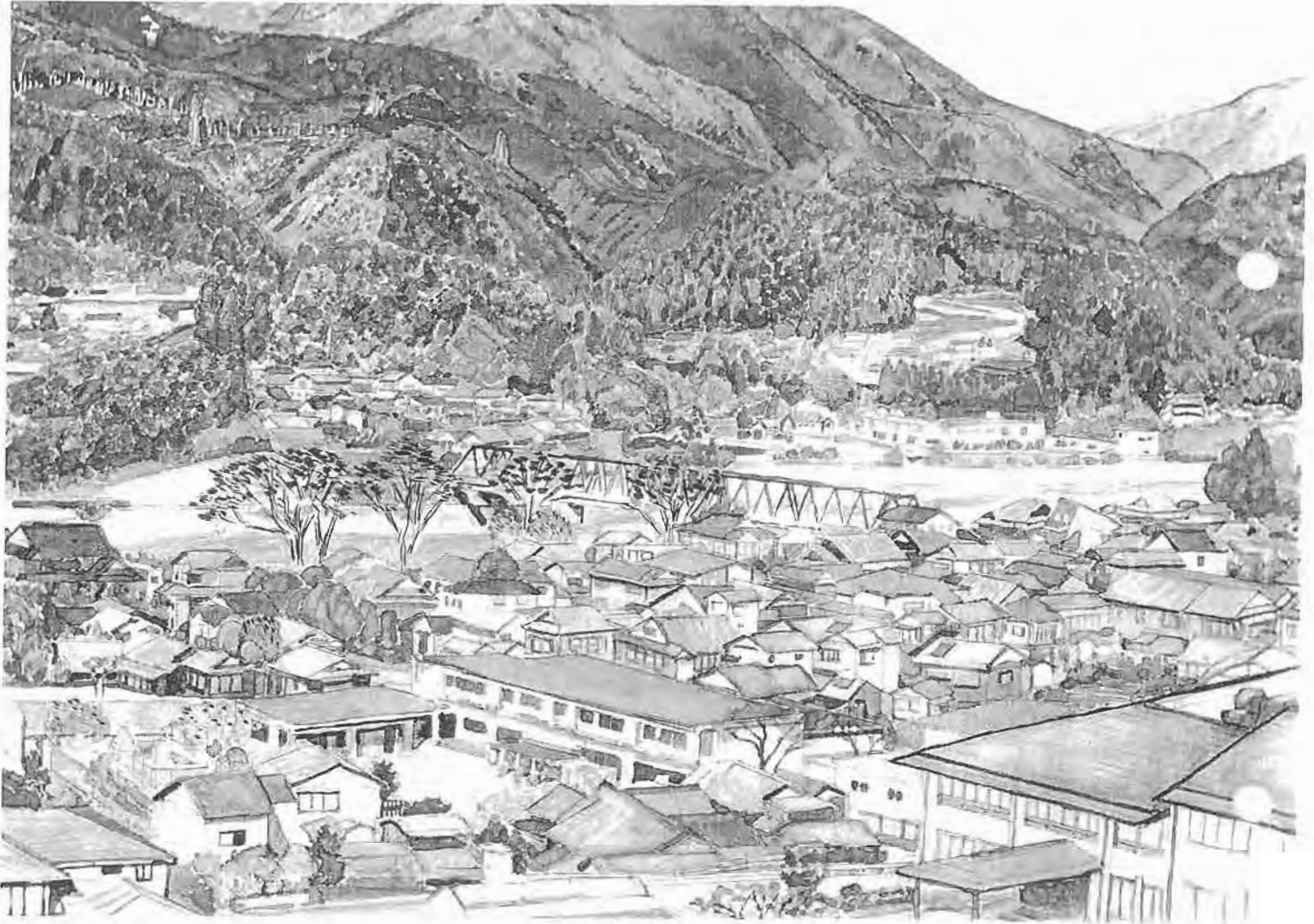


中川根ふる里通信

= 第98号 =

中川根ふる里通信
 昭和61年4月20日創刊
 編集・発行・連絡先
 静岡県榛原郡川根本町
 上長尾859-6



千頭せんず 小長井こながい 川根の小江戸

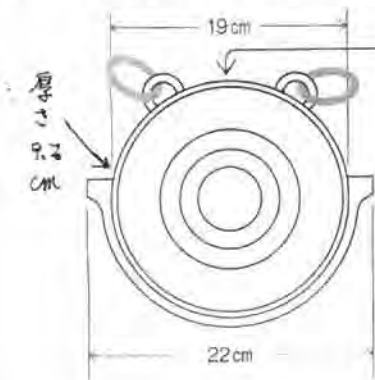
小長井地区(川根本町東藤川)の町文化会館上部より、
 手前小長井地区、大井川対岸千頭地区のスケッチ。(秋の風景)
 カラーでお届け出来ず残念です。この地は木材・ダム・発
 電所建設工事基地、大井川鉄道終着駅と繁栄を重ねた所です。

スケッチは森田雅文さん。(東京よりUターン川根本町民)

昭和47年3月25日 県指定文化財 智者山神社 魚口 (東藤川)

青銅製 直径22.0cm x 19.0cm
銘 貞和三年五月十八日
藤原時長 駿州徳山
奉施入 智者山金口
制作年代 南北朝

この魚口の特徴は、銘が、側面の吊環の間に記されているもので、摩耗することなく、判明されます。(下図参照)



側面(吊環との間)
智者山神社
駿州徳山
奉施入
日ノ下五三三
智者山 金口

皆さんは魚口をご存知ですか。お宮やお堂の拝殿正面軒に懸けられ、お詣りの時にたれ下った細を振ってたくものです。鈴を懸けている神社仏閣もあります。
明治初期の神仏統廃合令や廢仏毀釈により多くの神寺が統合されました。同境内にお宮とお寺が同居していたものもわずかに残り、別々に残りました。
ふる里の文化財を見ますと、何百年を経て守られている魚口の品、内県指定が4品、町指定が7品あります。魚はサメ類の古名、因幡の白兔の、淡路島まで魚を並べて渡る伝説もさることながら、横に開けた大口を参拝の際あおぎ見るのも一考です。

ふる里の文化財 第五回

工芸 魚口 II品紹介

昭和47年3月25日 県指定 熊野神社 魚口

熊野神社所有(青部)
青銅製 直径23.5cm x 22.5cm
銘 奉施入 熊野若一王子全
應永十六年己丑五月三日
伴實良 敬白
制作年代 室町前期

この神社の創建は詳かではありませんが、熊野三山を祀るところと古記録があります。熊野神社の古い棟札に「應永十六歳(二四〇九)己丑五月三日」とありますから、社殿の新築と同じくしてこの魚口が奉懸されたことになりました。
なお、この神社の祭典時に奉納される神樂舞が、先号で紹介致しました因代神樂と同じ様形態で、貴重な文化遺産となっております。



智者山神社の創建は古く、古書によると大化三年丁未三月(六四七)とあります。当初は大野神社と呼ばれ、現在地の直下二、三〇mの風尾山に鎮座していたという。ふる里でも最も古いお宮です。
現地へ遷座された時期は詳らかではありませんが、神社の棟札に「暦応五年(一三三二)と貞和三年(一三三七)」があります。その時点で社殿が新築、もしくは再建されたものと思われます。
又、当境内は千手観音、金剛菩薩の相殿も有する聖場でもあります。ですから、どちらかに奉懸されたものと考えられます。町内で最も古い魚口です。

昭和31年10月17日県指定文化財

敬満大井神社 鰐口

敬満大井神社所有(千頭)

青銅製 直径 21.2 cm

銘 遠江国山香庄 大磐口 十六日 浄心

制作年代 室町前期



この二つの鰐口は、昭和三十一年に県指定の有形文化財工芸品として指定されており、歴史ある文化財です。

銘は解説不能な字もあり、應永廿六年(二四一九)の時点では、ふる里の大井川右岸全体は遠江国山香庄に属していたことがわかります。

右の鰐口は「マトお尾羽」にあった神社か、お堂に懸けられていたものが合祀されて、敬満大井神社に祀られるようになったと想像されます。

千頭から西へ伸びる尾根に高知山という山があり、その付近に千頭嶺城があったと伝えられています。その付近にマトおハネという地名があります。

大井川の右岸と左岸は、昭和三十年頃の合併まで、右岸は榛原郡、左岸は志太郡と川幅の狭まった中、上流でも行政区は遠い川をはさんで、近くて遠い所だったようです。北遠江一帯が室町時代ごろ一時山香庄に属していました。

昭和31年10月17日県指定文化財

敬満大井神社 鰐口

敬満大井神社所有(千頭)

青銅製 直径 19.1 cm

銘 奉懸 遠州千頭八幡 鰐口

千時永正六己巳八月十五日

願主 頼融 制作年代 室町中期



千頭の八幡社は明治七年六月十五日敬満大井神社に合祀されました。この鰐口も、神体と一緒に奉納されたものと考えられます。

敬満大井神社の祭神は、伊弉冉尊・天兒屋根尊・日本武尊・瀬織津姫尊とあります。

景行天皇(第十二代天皇)の時代、日本武尊が千頭の黒星山へ登山のあり、敬満神社を建立と「榛原郡誌」にあります。最古の棟札には「天平宝字八年(七五六)霜月吉日奉造元」とあることから、日本武尊の時代とあり、無縁の様にも思えますが、他に証明するものが無いとされます。初めは敬満神社といわれ、後に大井神社が合祀され、現神社名になったのではないかと考えられます。

昭和四十年頃、松岡としじ本川根町長に「敬満はくまと言ひ、神様は遠いオリエントの方からいらした...」という若い時聞いた話がよみがえって来ます。

昭和45年11月2日 町指定文化財

町保管 鰐口

青銅製 直径 24 cm

銘 入野八王寺大権現鰐口
現世安穩 後生善處
永正二天又月日 願主左近衛門

制作年代 永正2年(1505)室町中期

この当時から幡住には 八王子社があり
そこに懸けられていた鰐口ではないかと思われ
入野は大野山(智者山付近の古地名)の入口と
いう意味も考えられます。



昭和56年3月30日 町指定文化財

町保管 鰐口

青銅製 直径 12 cm

銘 貞享三丙寅九月吉日
願主 望月弥五兵衛

制作年代 貞享3年(1686)江戸中期

この鰐口は 大井川の土砂の中から
掘り出されたものと言われておりまして、
銘文は明確ですが、どこの神社仏閣に奉懸
されたものかは不明ですが、授りものとして、地区の
人に守られてきた
ものです。



昭和54年3月5日 町指定文化財

久保尾阿弥陀堂 鰐口

青銅製 直径 22 cm

銘 奉懸鰐口事 遠州榛原郡山香庄
嘉吉元年十二月十五日(1441)
久保村阿弥陀堂大施主孫二郎敬白

制作年代 室町 中期

銘から山香庄がこの頃は榛原郡
に属していた事がわかります。

現在、阿弥陀堂は久保尾熊野神
社境内に建てられていますが、大正2年
旧久保尾小学校敷地から移転された
ものです。



昭和55年3月13日 町指定文化財

外森神社 鰐口

青銅製 直径 18.5 cm

銘 大日本國東海道遠州萩原郡紫土野庄
家山郷大間平村 天長地久吾壽萬
安普 寛文十二壬子天正月吉日
望月八兵衛寄進 願主敬白

制作年代 寛文12年(1672)江戸前期

外森神社所有の鰐口です。

銘文は 明確ですが、地名文字が当て字です。
この時代、大間地区は大間平村と呼ばれ
榛原郡志戸呂庄家山郷に属していたことが
わかります。



昭和55年1月24日 町指定文化財

八柱神社 鰐口 坂京八柱神社所有

青銅製 直径 27cm

銘 八王寺天王 駿嘉志田郡坂京村
寶曆二壬申歲五月吉日
金壹分 施主八十郎

制作年代 宝曆2年(1752)江戸中期

この神社の前身は、天王八王子社と呼ばれていました。現在では八柱神社となっています。

鰐口としては大型で、外まわりには30個ほど乳頭状の突起をめぐらせ、内まわりには花模様を描かれ、美しい鰐口です。芸術的な貴重な鰐口といえます。



昭和55年3月13日 町指定文化財

鰐口 (大村喜隆氏所有)

青銅製 直径 9cm

銘 五郎右エ門 四郎兵衛
小次右エ門
巳十二月十九日

制作年代 江戸時代

外森神社(大間)宮司大村善朝氏が保管していた鰐口です。制作年代は明確ではありませんが、江戸時代あるいはそれ以前と推定されています。



昭和55年3月13日 町指定文化財

東方薬師堂 鰐口 桑野山区 所有

青銅製 直径 14.5cm

銘 寛政十戌午十二月吉辰
駿嘉志田郡川根桑野山村 願主惣八
制作年代 寛政10年(1798)江戸中期

東方薬師堂の鰐口は小型ですが、保存状態も良く、銘文も明確です。



以上、川根本町の文化財の内鰐口、県指定四品町指定七品を、ご紹介致しました。
この鰐口から想像するに、この山深い里に、お宮やお堂が多く存在し、人々の心のささぐえになっていたのではなにか、と、又、遠い昔のご先祖様達は、神様も仏様も同じ所にお祀りしていたのではなにかと、それは、日々の生活に、とけ込んで、身体健康・家内安全・豊作祈願など、。。。お願いに詣りました。ありがたうございませう。と、これらの鰐口を、たいてい参詣した事を表したのではなにかと、想いを、はせました。そして、現代まで、守りぬいた、ご先祖様も素晴らしいと思えます。大切な文化財です。参考資料 川根本町の文化財、

智者山神社・智者山観音堂について

川根本町 木村 田 雅 文

旧東川根村に昔から近隣の厚い信仰を集めてきた「智者山神社」に「智者山観音」について、資料などに基つきご報告させていただきます。

大井川鉄道千頭駅を降り、川根大橋を渡り、ガソリンスタンドの角を左折し、小長井河内に架かる橋を渡り少し歩くと、右手に智者山神社の案内板が見えてきます。ここから山道になり御詠歌の歌詞を書いた幟旗と石像を教文ながら、平栗集落を通り抜け、7kmほど歩きつめると三体の石像と神社の石柱、石段が目に入ります。鳥居をくぐり、険しい石段を登ると大木に囲まれた森厳な地の正面に智者山神社が、その左手には千手観音堂が並んで建っています。

智者山神社

智者山神社は、昔から近郷の旧藤川地区の小長井、平栗、富士城、洗沢、攻京、前山、柳瀬、三盃地区の住民が氏子となり、おまつりしてきたお社であり、大井川流域に加え、藁科川沿いの旧大川村などの住民からも厚い信仰を集めてきた神社です。

この智者山神社は、いつごろに創立されたのかは不詳（古書によると大化三年（六四七年）との記述もあり）であるが、その昔は山道の下、大野岡（風尾山と呼ばれる説もあり）に位置し、大野神社と呼ばれていたが、氏子たちが神を足下においてはいけないと考え、現在の地に移転されたようです。

智者山神社には静岡県から昭和四十七年に文化財に指定された「鰐口」が保存されており、貞和三年（一三四七年）五月



十八日の銘が刻まれています。また、神社が新築もしくは再建された際に取り付けられた「棟札」には暦応五年（一三三二年）と記されていることから、一三三四年代には現在地に神社が建立されていたものと推測されます。

神社には、大山津見神（おやまつみのかみ）、獲田毘古神（さるたひこのかみ）、天之水分神（あめのみくまりのかみ）が祭られており、春秋のお彼岸の中日には氏子が当番組を設け、例祭が執り行われていきます。智者山神社は古には、「十二所権現」と称されており、天神七代十一神、地神五代もおまつりしており、現在は境内社としてこれらの神々もあわせておまつりしています。

「天之水分神」を祭神としている智者山神社は、雨乞いの神社として広く大井川流域の信仰を集め、下流域の藤枝あたりでは水不足になると瀬戸谷の高尾山（六七五m）で雨乞いの儀式を行い、それでも効果が得られない場合には、さらに上流にある高根山（ハ七一m）で祈願し、最後はこの智者山神社まで出向き、雨乞い祈願をされたとの話も残されています。最近、「智者」の名前に因み、入試合格を祈願する中学生などが絵馬に願いを書いて奉納しています。

神社の宮司は、代々、旧大川村や旧東川根村の神職が務めてきており、現在は小長井の芹澤徳治さんが務めています。

千手観音堂

智者山神社の隣には千手観音堂があり、智者山神社の信者の方々があわせてお参りをしております。日本人のおおらかさなのか、神様と観音様が並ばれ、ともに信仰の対象となっております。神社の春秋の例祭では、観音堂での僧侶の読経の後、神社の祭典が執り行われていきます。観音堂には旧大川村の僧侶に由来していたいており、現在は旧清沢村のお寺にお願いでお願いしております。



智者山神社への参道には、昭和九年に千手観音を信仰する地元の高志家(女性を中心とした御詠歌を唱える信者たち)が寄進した三十三観音像(石像)が第一番から第三十三番まで、おおよそ一ロム、二ロム、三ロム

ごとに、寄進者の名を記した石台の上に「道しるべ」のように置かれています。

この三十三体の観音像は、西国三十三所巡礼に因んだもので、第一番青岸渡寺(和歌山県那智勝浦町)から大坂府、奈良県、京都府、兵庫県、滋賀県の寺を巡り、第三十三番華嚴寺(岐阜県揖斐川町)までの観音像を模したものです。観音像の脇には、番号とともに各番所で詠まれる御詠歌が書き



また、三十三所の観音菩薩巡礼により現世で犯した罪が消滅し、極楽往生できるとの信仰心によるものであると言われていきます。(次ページ「西国三十三所」参照)

大井川の上流域で、日々農作業と家事労働に勤しんでいた女性たちには、西国三十三所巡礼の資金も時間もないことから、御詠歌ゆかりの寺々であるこれら三十三か所の観音菩薩像を智者山の観音堂参拝の折にお参りすることとしたものと思われまます。(寄進者名には私の祖母や曾祖母の名前があることから、生前に少しでも石像建立などのお話をうかがってあげると悔やまれます)

追記

智者山神社は、残された鰯口や棟札から一三四〇年代に建立されたものとされています。この頃の日本の状況について調べると、蒙古襲来があった文永の役(一二七四年)、弘安の役(一二八一年)などにより鎌倉幕府の力が衰え、執権の北条氏が一三三一年に後醍醐天皇に対抗して光厳天皇を立て南北朝時代となりました。一三三八年には足利尊氏が征夷大将軍となりましたが、

込まれた幟旗が立てられていいます。この三十三所とは、観音菩薩が人々を救う際に三十三のお姿に変化するとの教えに基づくものであり、観音菩薩の功徳にあやかるために、

西国三十三所

番	寺号	通称/別称	札所本尊	宗旨	所在地
1	青岸渡寺	那智山寺	如意輪観音	天台宗	和歌山県 那智勝浦町
2	金剛宝寺	紀三井寺	十一面観音	救世観音宗	和歌山県 和歌山市
3	粉河寺		千手観音	粉河観音宗	和歌山県 紀の川市
4	施福寺	横尾寺	千手観音	天台宗	大阪府 和泉市
5	葛井寺	藤井寺	千手観音	真言宗	大阪府 藤井寺市
6	南法華寺	壺坂寺	千手観音	真言宗	大阪府 高取町
7	龍蓋寺	岡寺	如意輪観音	真言宗	奈良県 明日香村
8	長谷寺	初瀬寺	十一面観音	真言宗	奈良県 桜井市
9	興福寺		不空絹索観音	法相宗	奈良県 奈良市
10	三室戸寺	御室戸寺	千手観音	本山修験宗	京都府 宇治市
11	上醍醐寺		准胝観音	真言宗	京都市 伏見区
12	正法寺	岩間寺	千手観音	真言宗	滋賀県 大津市
13	石山寺		如意輪観音	真言宗	滋賀県 大津市
14	園城寺	三井寺	如意輪観音	天台寺門宗	滋賀県 大津市
15	観音寺	今熊野観音寺	十一面観音	真言宗	京都市 東山区
16	清水寺		千手観音	北法相宗	京都市 東山区
17	六波羅密寺		十一面観音	真言宗	京都市 東山区
18	頂法寺	六角堂	如意輪観音	天台宗	京都市 中京区
19	行願寺	革堂	千手観音	天台宗	京都市 中京区
20	善峯寺		千手観音	善峯観音宗	京都市 西京区
21	穴太寺		聖観音	天台宗	京都府 亀岡市
22	総持寺		千手観音	真言宗	大阪府 茨木市
23	勝尾寺	弥勒寺	千手観音	真言宗	大阪府 箕面市
24	中山寺	中山観音	十一面観音	真言宗	兵庫県 宝塚市
25	清水寺	播州清水寺	千手観音	天台宗	兵庫県 加東市
26	一条寺		聖観音	天台宗	兵庫県 加西市
27	園教寺		如意輪観音	天台宗	兵庫県 姫路市
28	成相寺		聖観音	真言宗	京都府 宮津市
29	松尾寺		馬頭観音	真言宗	京都府 舞鶴市
30	宝厳寺		千手観音	真言宗	滋賀県 長浜市
31	長命寺		千手観音		滋賀県 近江八幡市
32	観音正寺	仏法興隆寺	千手観音		滋賀県 近江八幡市
33	華厳寺		十一面観音	天台宗	岐阜県 揖斐川町

国内は、その後も南朝方と北朝方の武士の戦いが三九二年まで続きました。その間、大井川流域では一三三三年には南朝側の土岐氏の居城であった徳山城(無双連山)が北朝側の今川範氏により落城したとされています。その際、智者山神社近くの護心土城(富士城地区の山城)も攻められ落城しました。このような

戦いに明け暮れ、明日が分からない時代には、地域の人々は神仙に日々の平穏をお願いすることしかできなかったのかもれません。智者山神社はこのような教科書の中の歴史と教科書にも記されない歴史を現代に伝える地域の文化資産であると思えます。

(参考図書)

- 「川根本町の文化財」川根本町教育委員会編
- 「榛原郡神社史」静岡県神社庁榛原支部編
- 「智者山神社参道 三十三体観音像」スクラムどんぐりボランティア編
- 「本川根町史通史編 年表」本川根町史編纂委員会
- 「本川根町ふる里」芥澤久雄氏
- 「西国三十三所」Wikipedia

特集 今一度 満州

太平洋戦争終戦から六十八年の歳月が流れました。今年も八月十五日がやってまいりました。この日は、平和の尊さを噛みしめ、二度と戦争は致しませんと誓わなければなりません。

日清・日露戦争により日本国の領土も広がり、朝鮮半島やがて満州国との同盟も締結され、広大な国土を持つ国家になって行きまわりました。明治末から四十年たらずの間に、本土(現在の日本国)から外地へ、約六、五八〇、〇〇〇人が進出していきまわりました。

その内約半分は日本軍関係者で残りの三、二五〇、〇〇〇人は一般国民・民間人でした。まさに民族大移動で、この様な歴史は世界に類を見ないといわれています。特に、中国東北部満州への進出は、国策の満州開拓分村計画と合置して、日本の新地が出来、繁栄の一途をたどっておたそうです。が、その陰で、満州を統治していた関東軍は、戦争拡大、南方戦場に主力を移し、蛇の殻、民間人の働きごかりの壮年、青年は次々と召集されて、兵隊さんになり、満州を守るいわゆる鉄の戦士となって行きまわりました。昭和二十年八月九日、深夜に始まったソビエト侵攻は、国境を突破され、満州は戦場となりました。鉄道網、鉄橋、道路は破壊され、砲弾の飛び交う中、追われる身となった日本人は、逃げて逃げ、逃げ惑い七日間(八月十五日終戦)を耐えぬいた人々は、大都会に向けて行進し、砲弾にたおれた人々は、置いて行かれ、満州の土となりました。一方兵隊さん達は、終戦と共に、武装解除され、連帯になって貨車に乗せられ、シベリア抑留捕虜となった人数五六〇、〇〇〇人とされていきます。

離民となり、近い大都市にたどりついた日本人は、新京二五万人、奉天四十万人、大連十六万人、錦州八万人、鞍山六万人、ハルビン二万人、チケハル二万人、安東二万人、この都市だけでも一〇〇万人をこえていました。

そして、昭和二十二年夏から約十年間、大陸からは胡盧島などから本土に引揚げた人々は一六〇万人といわれています。長い収容所生活、飢え、寒さ、病気、暴行などで命を落とした人々は帰還された人々以上の数にのぼったといわれています。

前置が長くなりすぎたが、私達の一生の中には思いもかけない出来事に出会うことがあります。「噂をすれば影とやら」「正夢」「お告」など科学や理屈では解けない事例も多く、大なり小なり経験された方もいらっしゃると思います。

何年か前の事です。当時川根本町生涯学習推進委員長植村哲司さんより、幼少の頃大変な経験をされた事を伺いました。それは、

「満州の町外れの公園のブランコを漕ぎながら、赤い夕陽を見ていた。夕陽の中から二人の大人が、こちらに向かって来る。「ああ、父ちゃんだったらどんなにいいだろう・・・」その二人の姿は、どんなに大きくなって――、本当に父ちゃんだった。」

植村さんに無理を承知で「満州での体験を書いて下さい」とお願いしたところ、しばらくしてレポート形式の稿が届きました。今号「今一度満州」の特集を組みました。ふる里通信では、第18号(第22号・満州移民、第21号・私の戦争(藤田正義)、第62号・満州開拓団(中野幸逸)、荒川村日中友好訪問団募金、第70号・シベリア捕虜(中野幸逸)など特集を組みました。今回は、今迄とは別の視点でお届けします。(敬省略)

旧中川根町は、終戦前四十年間に外地に進出された方々の記録に残っているだけでも七十四人(家族共)にのぼります。職業も事業家・会社員・教員・店員看護婦など様々で、満州分村移民・軍人さんとは別に「海外雄飛組」とも呼ばれ、各地で頑張っていました。その中で、横田茂さん、横田すみさん、馬淵茂さんをご紹介します。

◎横田茂、興安東省礼蘭屯に在住。鐘紡経営の興安牧場経営者で、福島県会津出身。旧制中学卒業後十八歳の青年は、青雲の志を以て北滿の大地にひとみ、一望千里の沃野に牧畜経営の将来性を見抜いた。聰明な大人物でしたが、ソ連軍侵攻により四十年近く開拓した地をほなれ避難中に死亡。享年五十七歳。要すみ。

◎横田すみ、瀨沢の名主、村松嘉蔵の末裔で相良町出身。宝石商を営んでいた兄を頼って満州に渡り、ハルビンで産婆を開業。後、茂さんと結婚。酪農事業の夫を助けながら助産や看護の仕事に従事。帰国後は上長尾に住みつき、助産婦、家族計画、母子保健に尽くされ、町で初めて生存者叙勲の勲六等瑞宝章を授けられた方。

◎馬淵茂、旅館経営・上海張家口に在住。本町出身者で最も早く外地に旗揚げした人といえる。椋原中学卒業後、地元の上長尾小学校でほんの少し教鞭を握ったが、学問の必要性を感じた為、拓殖大学に学び、青雲の大志を外地に求めて中友に北支に蒙疆に大活躍をした。張家口に在った人の言うに、馬淵主人に二回程度会しているか、張家口にいた日本人は勿論、蒙疆人でもマータインジと云って誰知らぬ者は無かった程、彼の名声は知れわたっていたと話してくれた。マータインジ即ち馬(淵)大人であろうと推測するが、彼の偉大さを物語る一語である。(戦後死亡と推定)

以上三名の方々の紹介は、昭和四十九年八月発行の『ああ拓魂』中川根町拓友会発行から抜粋させていた。だきよした。この本は中川根村開拓団の歴史が記載されている貴重な書物です。その最終章に海外碇宿の記録もありました。

今回植村哲司さんの寄稿と共に、植村鏡平さん(瀨沢)杉本保太郎さん(原山出身)大橋定男さん(地名)の稿もご紹介致します。又、いずれの日にか、ああ拓魂のざっしりと重い内容の一部でもご紹介できればと思っております。

★満州での思い出

瀨沢植村哲司

父が満州に仕事をする為家族で満州に向かったのは私が二歳の事でした。

渡満期間は昭和十七年八月十二日出発、昭和二十一年九月八日には帰還したので、四年間を満州ですごしました。

渡満目的は、株式会社鐘紡の参与、横田茂氏の勧めによるもので、関東軍に乳製品を収めるため、牧場と乳製品工場を運営している。その内の牧場管理の仕事をしてみたいかと、この勧めに父が応じた為でした。

父の就職先は満州林業株式会社上庫力事業所、カナダガヤ牧場主任で、所在地は興安北省東額旗上庫力でした。

私の記憶にあること

◎牧場周辺の風景

・東側 数百メートル先に大きな川があって、ロシア人が船に乗って魚を捕っていたのを見た。その場所は川幅が広く洲のように記憶している。又、その川の支流は判らないが、兩岸に馬を配置し、縄を引いて魚を捕ったことがあった。又と何回か釣りに行ったこともあった。ソ連との国境が近い。(母の話では、20kmくらいのこと)

・西側 ハイラル市方面で広大な地平線となっていた。父がハイラルから馬に乗って帰って来る時、初めは黒い点に見えた。朋のあたりが見えるようになるまでにはかなりの時間がかかった。

・南側 あまりはつきり憶えていないが、西側同様であったと思う。北側 小高い丘があつて一面に色とりどりの花が咲き乱れていた。

家族でハイキングに行った思い出がある。

◎野焼

冬を前に春の新芽を出す目的で野焼きをした。防火対策とどうしたかは知らないが、満人ヤロシヤ人の苦力(クーリー)が大勢廻りにいた。

◎交通手段

夏は馬車、冬はソリ、冬ハイラルルへ行く時など凍傷にかかるため母が雪で顔をこすってくれた。

◎住居

窓は二重、暖房はペーチカ。間取りは日本間が4部屋、上庫力（上ルクーリ）には満人とロシヤ人しか居なかった。

◎日中の遊びと使った言葉

毎日ロシヤ人の子供と遊んでいた。父が牛の便秘を解消するため、肛門から腕を入れているのを見て自分も入れてみたが、後で考えてみると産道へ入れたのではないかと思う。満人の子供はいなかったのではないか？遊んだ覚えがない。使った言葉はロシヤ語 憶えている。言葉は、1から4までの数字を、アジン・ドアー・テリー・チテリーといった。犬はサバーカ。以上の言葉については、職場で王子製紙の人に「どうしてその言葉を知っているの。」とたずねられたことがあったが、その人はカラフト出身と聞いた。

◎狼の話

積雪量は多く無かったと父から聞いたが、夜など月明かりの外を眺めると狼がいた。雪景色の中で、はっきりと確認できた。朝、牧場へ行くと子牛が倒れて尻の肉を食いちぎられているのを見たことかある。父からは「狼の仕業」と聞いた。

◎ハイラルルの乳製品工場

レイアウトは憶えていないが、牛の腸へ挽肉を詰めてソーセイ

ジを作っているところを見た。

◎終戦から帰還まで

◎ソ連参戦

ハイラルル小学校一年生の夏の朝、飛行機の発する爆音が響き、わたり爆弾投下が始まった。今でいう同報無線で「今のは演習である」との放送がなされたが、様子がおかしいと判断した母は、弟を背負い、私の手を引いて外へ出た。その直後には家の跡形も無く消えていた。あたり一面蟻地獄のように円錐状の穴があいているのを見た。爆弾が投下された跡であった。

◎逃走開始

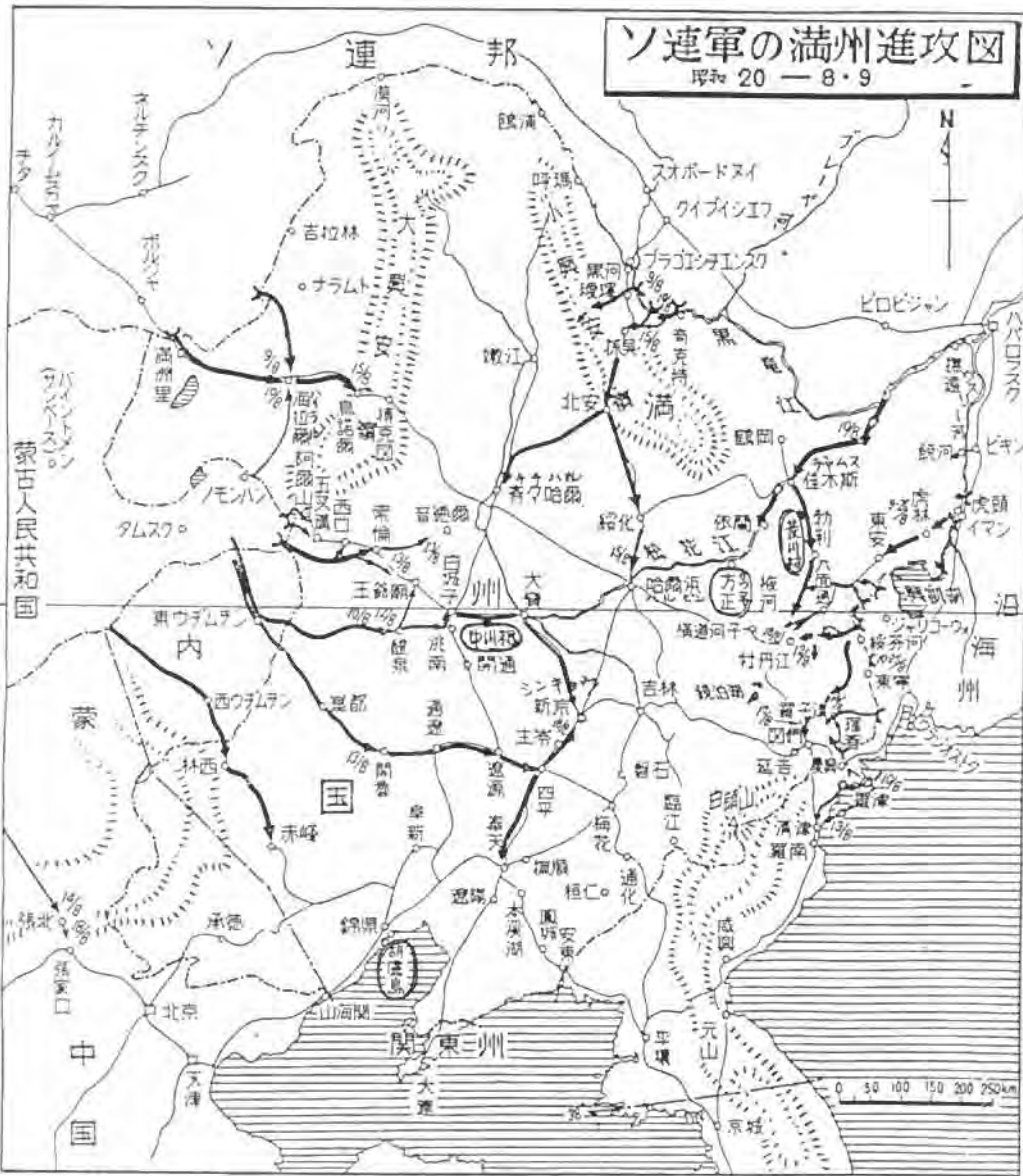
避難時のごとは記憶に無いが、父の記録によると「救急列車にてハイラルルを脱出チチハルル向かう」とある。父は家族と離れて別行程であったが、話によると牛を30頭くらい追いかから南下したとのこと。食べ物はどうもろこしと牛肉のみと言っていた。

◎逃走時の記憶

歩いたり、無蓋車に乗ったりして移動した。この子供も持てるだけの荷物を持ったが、自分は荷物を背負うことなく歩いた。当然、体力の消耗は少なく元気であった。その理由は、母が男の人を2人雇い荷物を持ってもらおう見かえりに食べ物を提供したから。

◎弟の死

昭和20年12月チチハルルにて弟が死んだ。一旦は土葬したものの、遺骨を持ち帰りたいとの、母の強い思いから再度掘り起こし火葬した。凍結していた弟の顔が今でもはっきり思い出される。



◎満人ゴンの来訪
チチハルで避難生活をしているとき、父が牧場で可愛がっていた満人ゴンが訪ねてきた。いくらかのお金とせんべいを置いて帰った。母の話だと「ゴンは前後しなから跡をつけてきた」とのこと。人の情というもの、どこでも同じと感じた。

◎父との再会
新京の收容所に到着した時、自分は元気があつたところから、母に小遣いをもらい駄菓子を買に出た。広場のプラシコに腰を降り食べていると、夕日の方向から二人の人が歩いてくるのが見えた。その姿が父に似ていた。まさか、と思ったが、父と確認できたときの喜びは今も思い出される。

◎帰還

胡蘆島より乗船し、博多港へ行ったが、船の中では一坪くらいのスペースに家族三人が寝起きした。これまでひもじい思いをすることなく来たが、船の中でサツマイモのつるの汁を出されたときは食べることができなかった。

博多へついて思ったことは、日本の貨車の小ささ、いことであった。

21年9月無事帰還、藤枝の母の実家に落ち着く。

ソ連軍の満州進攻図 (月/年)
今回号で3度目ですが改めてご覧いただければ嬉しいです。



胡蘆島は渤海湾の奥深くにある小港。百石の日本人を送りだした運命の港。

大陸の追憶 II ああ拓魂より II

* 在満四ヶ年 植村鏡平

大東亞戦争に突入すると共に統制は強化され、諸物資の入手は益々困難となり、折柄国や県は諸企業の合同を要請し、自由営業の存在は許されない状態となつて来た。

当時戦況は極めて明るい報道がされ、故郷に於ては満州分村計画は着々と進み、村民の誰もか発展意欲に燃えていた。

こんな状況にある時、以前より満州に在住の遠縁の横田茂氏より牧場の仕事があるから渡満しては、との勧めもあり、私も渡満を決意するに至つた。昭和17年2月急に先代より受継いでいた牛乳搾取販売業を廃業した。そして8月12日多勢の皆様に見送られて故郷を後に出發した。

朝鮮・奉天・^{ダライ}礼蘭屯を経て、興安北省^{ハイラル}海拉南市満州林業株式会社に到着した。任地は満州林業三河牧場で、海拉南を離れること一七〇キロ。興安嶺の西側にある山河に富んだ国境に近い上^{ルカ}庫力と云う白系ロシア人部落に着いた。

九月一日牧場主任として着任した三河牧場は、^{アマール河}黒竜江の上流アマール河の支流で根河の辺り五四口町歩という拡大な用地の中に小さな山を背にして事務所、日系宿舍、使用人宿舍、牛馬留柵など雄大なスケールで適當な間隔を保ち、なだらかな山裾に配置されている。前方に開ける広野「海原」に島かと思しは牛の群」と誰かの言つた句は正に適切。

牧場従業員は主としてロシア人で、男は農場や牧草刈り又それの運搬、放牧人は蒙古人、雑使役は満人と異民族ばかりの生活が始まった。言葉の通じないロシア人や満人を相手として仕事をしなくてはならないのは随分大変なことだ。何を聞きたくても何を言伝えたくて

も思う様にならず、無性にいらだたしさを感ずる日々が暫く続いた。そうした中にこの年も暮れようとして寒い冬の季節となった。零下三〇度を越す寒さだ。だが室内は「ペイチカ」を焚き常に二〇度位の温度に保たれている為薄着で過ごすことができ、洗濯物も室内で全部乾くという、誠に善し良い生活だ。外出するには馬橋が二頭立てで、ロシア人の手綱さばきも実に鮮かであり、疾走する時の快適さは例えようもないものだ。

そして長い冬も四月半ばになれば雪も解け、春らしい気候となりこの頃誰がやるのか枯野に火が放たれ、野火は勢い良く大波のよせて来るよりは緑相をなして、果しなく燃え広がって夜など全く壮観だ。そして五月、掃き清められた緑な野原に青い草の芽が、つくつくといき出て来る。同時に紫の小な花「インチュホワー」が一面に咲き揃う。これから八月末まで色々な花が咲き続けるのだ。五月四、五日頃より麦の蒔付が始まる。土壌の解氷度は表面十五、六ミリしかない。この頃の気候気分は全く例えようのない心地良さだ。内地の人達にも一度味ってみてもらいたかった。こうして夏の間九月迄自給農場の仕事と、冬に備えての乾草刈りで目まぐるしい五ヶ月間だ。

五族協和をキャッチフレーズとして官も民も色々なことを通じて努力した。然し人種は異つても人情に於ては変りない事を色々体験させられた。医者も産婆も居ない辺地で、妻の出産には随分心を痛めたが満人の妻が突によくやってくれた。その親切、脱出に際して馬に鞍を付け、「俺達は殺されるが貴男は早く逃げてくれ」と涙ながらに尽してくれたロシア人の親切、吾が妻子の避難先へはるばる尋ねて来て見舞ってくれた満人苦力の親切など、人情の厚さには心打たれるものがある。

こゝへ同時に書くのはどうかと思うが、牧場生活三年の間当中川根農場に居た上原(上原英一氏)が静岡新聞を一日も欠かさず郵送してくれた。草封に毎度自筆で書いたあの特徴のある字は内地の様

子を知ると共に異郷にあってこんなに懐しいものはない。この友情は終生忘れることは出来ない。

牧場の仕事は利益追求のみでなく、満州国の畜産に改良増産に貢献せんとするもので、それだけにやり甲斐を感じ努力した。ロシアや祖放牧場の所で乳牛五口頭入り牛舎二棟、煉瓦造りで建てた。とは仕事中心一番の思い出だ。

20年8月9日ソ連軍の進入により一切を放棄して興安嶺に逃げた。食糧もなく30日も牛の肉だけで飢をしのいだ。10月1日漸く新京にたどり着いた。2日後思いもかけず開拓団の皆縁と逢った時は本当に嬉しかった。ソ連進攻により別れ別れになっていた妻子が引揚直前になって遭遇した事も全く幸運であった。

引揚げまでの苦しみ、異民族より受けた親切や屈辱は皆縁同様だと思ひ書く事を省くことにする。

終戦当時年齢39歳、川根本町瀬沢（故人）

★ 巨大な大陸

杉本保太郎

昔話になりますが大正9年2月に上京して当時の鉄道院に就職し、一貫して鉄道者現在の国有鉄道に奉職してまいりました。戦争だけは昭和14年2月に鉄道省から華北交通へ派遣を命ぜられ、終戦の年即ち20年の12月まで7年間大陸の鉄道業務に携ってりました。華北交通とは山海關から南方の鉄道で、満州は内地への往復に満州鉄道を利用して通過した程度で、満州の事情は全くといっていい程知らないのです。7年の間いわゆる現場の勤務ではなく、鉄路局内の勤務でした。

最初は済南で徐州、開封、張家口、北京の順序で各鉄路局に転じ終戦を迎えたのです。現在は日本で過疎とか過密とか、或は列島改造など云々しておりますが、今にして思えば中華民国と

はあらゆる資源に豊富は何と巨大な大陸であることを改めて痛感せざるを得ません。当時の日本としては当然あの大陸へ進出する政策を考えたことでしょう。その頃は一億一心とか、生命線を守れるなどのスローガンで、国民の総てがこれに従う心に不思議はなく何の疑もなくこれに従ったものです。現在のようには平和運動とか民主主義、或は自由などと叫ぶ者は先ず見当らなかつたのです。あの活気に溢れていた大連や奉天、新京を初め、華北では北京や天津というようには忘れることの出来ない大都会、開拓された諸々の産業や施設を数え切れない程残して終戦、そして引揚げとなりました。

戦後の変遷の中であの思い出の大陸は中華人民共和国という社会主義国に変貌しました。戦後30年にして漸く我が国とも国交の正常化という事ですが、戦争ということが戦線に従軍された軍人は勿論ですが、開拓という産業の最前線に家族ぐるみで、あらゆる犠牲を克服し乍ら活躍されたことも敗戦という結果は悲惨なものであり、一体戦争で得たものが何であつたかをしめじめ痛感し、数々の疑問だけが残りざるを得ません。

五十年の年代の者が一生の中で殊に大陸生活の経験者の誰も、当時を思い出さなければ、戦争のもたらした人命や財産に及ぼす悲劇を繰返さない事を誓うべきではないだろうか。

又将来これを伝える意味からも活躍された方々が「開拓史」として記録し、永く永くに残されることを歓迎し、その企画された御苦労に衷心から敬意を表し、筆をおきます。

川根本町久保尾字原山出身（故人）

★ 牡丹江赤十字から大橋 定 田男

それは焼きつくように暑い7月の始め満ソ国境には重苦し

い空気が漂っていた。日毎伝つて来るニュース、人から人へ伝わる流言、どれ一つ勇氣付けられるものは無かった。今まで静かに入院していた満人患者が昨日一人今日一人と退院して行くのが目に映る。

果せるかな7月中旬ソ連軍越境侵入し、戦車を使って南下し、途中関東東軍と随所で交戦している由、7月30日と思う午後3時頃ソ連機飛来して赤十字宿舎の前に爆弾2つを落とす。夜に入って遠くで爆発音がヒツキリなしに聞えて無気味な夜に一夜した。その夜家族は取るものも取らず病院に集合して奉天の赤十字本社に疎開することになった。

翌朝家族を出発すべく駅に向つた。ところが駅にはすでに疎開の人と荷物で足の踏場もない有様、皆大きな荷物を持つて子供の手を引いて列車に乗りこんでいた。漸く家族を乗車させ男達は又病院に帰つて残務整理を始めた。取りあえず病院を引き払つて新京に疎開する準備を整える。私は金庫の中に保管中の医師兼刺士、看護婦の免許証を本人に渡し、その他の書類は焼ぎ払つて、当分の食糧品を携帯して駅に向つた。依然駅の中、ホームは大混乱して積み切れずに駅に残した荷物は山のようにあった。乗るには乗つたが夜中の2時3時になつても出発しない。その内列車の前の方で歓声が上がつた。聴いて見ると日本軍艦がウラジオスロックを占領したという。私も思わず万歳を叫んでしまった。

汽車は漸く朝になつて奉天市に向つて出発した。單人の頃地方面として幾度も通つたこの鉄道も今日敗戦車として再び帰るここのなからうこの通を一路南下した。途中横道河子(ここには白系ロシア人部落があつた)駅で半日の余停車した。いつ発車するか解らない為下草も出来ず、唯運転士が時々下車して食糧をアサリ出すので、その後について行つて芋や人参を土のままかじつた。

私達は男ばかりで、案外呑気でした。年寄り子供連れの人

達は、本当にみじめで、本当に死出の旅路ではなかつたかと思ひました。ハルビンに着き幾日かして荷車に乗つて新京に着いた。新京駅で始めて終戦を知つた。いよいよ来るものが来た。と心の引締るものがあつた。

奉天生れの日本人看護婦がどうしても奉天に帰ると云うので連絡を兼ねて同行することにした。朝新京を立てて途中幾つかの駅に停車しながら夜の11時頃奉天についた。駅に降り立つと幾千人の満人が歓声を上げ乍ら群がっている。ここを通らないう限り赤十字本社に行けない。車中で同じだつた日本人も姿はもう見えぬ。思案の揚句看護婦を背負つて、絶対に離れてはいけぬと云い聞かせながら群衆の中に入つていった。抵抗することは許されぬ私達は、荷物は全部取られ金は取られ横倒しに倒されたり、それでも離れずに女を背負つたまま目的地に着くことが出来た。本当によく生きていられた事が不思議な位だつた。

その後私は現地徴用され二ヶ月余り元奉天通信部隊収容された。多くの同胞は再び軍服姿でシベリヤに送られたが、私は幸い家族の許へ帰ることが出来た。(この部隊には近衛文隆大尉の死が在隊されていた為捕虜をまぬかれたと聞く)家族達の生活も先発隊の診療所開設によつて、苦しい乍らもどうにか生活が出来ていた。チラホラ引揚開始の情報も流れて身辺が急に慌しくなつて来た。しかし引揚の日までは何とかして生活をこなしてはならない。私は市街を離れた砂山と云う処で医師の診療を手伝い乍ら6人の元病院の関係者を引連れて頑張り続けた。

街には日本人同志のみにくい争いが幾つか起きて不幸を招いた人々も少なくはなかつた。でも診療所と云う所はソ連兵も満人も気軽に出入りして敗戦日本人だといふことも忘れがちな

た。長い在満生活でも、満州語もロクに話せなかつた私でしたが、終戦後の一年間で随分通用するようになった。

永い冬が明け氷が解け始め木の芽が青み出した五月、待望の引揚が始まった。町の人々も俄かに活気が出て来た。診療所の備品は全部隣の満人に与えてリュックに日用品だけをツメ込んで6月10日砂山の街を後にした。

あの悪夢の奉天駅から一路コロ島へ、ここで一泊してよいよ引揚船乗船だ。懐しい月山丸船上了。検疫官として鉄道部隊で一箱だった軍医もいた。奉天の駅で生死を共にしたあの看護婦も軍服姿で検閲に当たっていた。これらの方々に目と目で別れを告げ、報ゆることの少なかつた満州国に別れを告げ、ここまで来ればもう大丈夫とみんな胸を撫でひろして一歩一歩タラップを踏みしめていた。

終戦当時28歳 奉天赤十字病院 技術院

川根本町地名在住(故人)

——編集室より——

今号にて植村哲司さんよりの寄稿を中心に「特集」今一度満州を紐ませていた。私元には昭和49年に発行された中川根町拓友会発行「あゝ拓魂」の書があります。B5版300ページにも及ぶ重い書籍です。内容もそれはく重いものです。主に川根開拓団史です。郷土編・開拓編・再建編に分かれ、中川根村分村開拓団のはじめから終りまで克明に記載されています。編集発行に当られた人々の熱い想いと強い決意がひびくと感じられる書籍です。その中より皆様には是非ともお届けしたいと強い想いにかわれ記載致しました。奇しくも植村鏡平さんは哲司さんの親——を注目して下さい。又大陸の追憶は40年前の記録です。

——携った人々——

事務分担

- ① 編集 沢井米太郎、諸田平吉、高木悦郎、中野幸逸、前川伊勢蔵
- ② 清記 池田武夫、板谷年純、和田四郎、山田哲雄、松下麟一
- ③ 写真 金沢達郎
- ④ 外渉 太田隆次
- ⑤ 開拓団関係 大西林平、友田茂、小沢駒一、植原忠一
- ⑥ 義勇隊関係 八木道之助、高木務
- ⑦ 勤労視察関係 太田隆次、山本嘉太郎
- ⑧ 外地関係 和田四郎、植村鏡平

各区の世話係

- 藤川・山田隆一、水川・板谷年純
- 上長尾・原信郎、高郷・高木務
- 八中・森下重作、梅高・小沢宗於
- 沼平・登沢真、下長尾・前田和乎
- 瀬平・松本京一郎、久保尾・杉本利作
- 三津間・沢井米太郎、久野脇・沢井公明
- 地名・山下克、下泉・松下麟一
- 田野口・和田四郎、徳山・久保虎一
- 川根町 道畑進、本川根町 秋元満四郎
- 志樺 岩塚太郎、静岡市 池田輝男、他区 前川伊勢蔵

あゝ拓魂

川根開拓団史・他

中川根町拓友会

編集 中川根町拓友会編集委員会
 ・準備 昭和45年10月～48年7月
 ・編集 昭和47年8月～49年3月
 ・印刷 昭和48年11月～49年7月
 ・発行 昭和49年8月

発行者 静岡県中川根町拓友会
 代表(会長) 高木悦郎
 発行所 静岡県中川根町拓友会
 印刷 株式会社長田文化堂

非売品

会計 高木務、板谷年純

全国茶品評会にて
川根本町は産地賞を受賞



第67回全国茶品評会
審査結果

★普通煎茶4kgの部(三等以上)

- 一等2席 相藤園 相藤令治さん
「農林水産省生産局長賞」
- 二等 つちや農園 土屋鉄郎さん
- 二等 高田農園 高田智祥さん
- 二等 松島園 川崎好和さん
- 三等 川崎賢也さん

〔産地賞〕

- 優勝 川根本町(2年ぶり14度目)
- 2位 静岡市 3位 南山城村(京都)

★釜炒り茶の部(三等以上)

- 二等 川根本町茶業振興協議会
- 二等 瀬沢器茶共同組合

写真は、下長尾の裏山茶畑から、上長尾地区
広まった大井川、中徳橋、日向山すど大井川
鉄道SLが田野口に向かって走っています。

ふる里は新茶の時季に、未曾有の大災害に見舞われ
ほとんどの茶農家は収穫量の激減、茶摘みもろくに出来ず、
大打撃を受けました。半年がすぎ、茶畑は何もなかった様に
きれいな緑色をしています。夏の暑さ、空梅雨に、又ダメリ
ジを受け、今後が心配されます。茶農家の皆さんも、サーは
立ちなおってくれたでしょうか。

そんな中、今年も全国茶品評会に挑戦していたときまし
た。8月27日から30日にかけて京都府で開かれた「第67回全
国茶品評会審査会」において「普通煎茶4kgの部」で川根本町
産茶が産地賞第一位に輝きました。川根本町産茶の普通煎茶
での優勝は2年ぶり14度目となります。

悪条件を越して品評会に出品して下さった茶農家の皆
さん、ご苦労様でございます。おめでとうございます。とか
く暗いニュースの多いなかとても明るいニュースとなりました。
この朗報は茶産地川根に元気をいたたき、喜びの
受賞者をお知らせします。

「強力電波兵器」のこと

太平洋戦争末期、グアムやサイパンなど征圧された島々から飛び立って日本本土を爆撃しようとする敵機B29などを撃墜しようと考え、終戦直前まで研究開発していたのが、科学者達の考案した強力電波兵器です。

その仕組みは、マグネトロン（マイクロ波用の真空管、円筒形陽極と、その中心軸にある陰極をもち、電場に垂直な磁場をかけて発振させる。レーザー・電子レンジなどに広く用いられる。磁電管）で強力な電波を発生させ、敵飛行機のエンジンや計器を故障させることで、戦況挽回兵器として当時の日本軍がウラン爆弾（原爆）と二本柱で極秘裏に開発を目指した背景があり、敗戦と共に幻の兵器となりました。

旧海軍の研究所は島田市の特種東海製紙（旧東海バルブ）の敷地内にあり「島田実験所」と呼ばれていました。当時の島田市には全国第一級の科学者が出入りしていたということです。



戦時中、島田市に出入りした科学者の記念写真。後にノーベル賞を受賞する朝永振一郎博士（前列右から3人目）と湯川秀樹博士（同4人目）の姿も見える（1944年4月18日に第二海軍技術廠島田実験所で撮影）（朝日新聞（7月）刊）

後に島田市の空爆が度々あり、実験所も疎開することになりました。場所は島田市牛尾山、当時は榛原郡五和村牛尾に「第二海軍技術廠牛尾実験所」が建設され、大きなパラポラアンテナで強力な電波を照射して、敵飛行機を故障させる実験をしたり、動物への影響を

調べたりしていたとわれています。

一方科学者の疎開先は川根本町崎平にある大井川発電所だったようです。昭和11年当時電力王といわれた松永安左衛門がつくった当時東洋一の設備をほこり、昭和17年からは国家企業、日本発送電のものとなっており、建物内で科学者が研究をしていたのではないかと思われます。

町内の生草引であられた川根本町坂京の中野昌男さん（故人）より以前「大井川発電所に湯川秀樹博士がいらつしやり、写真もあるから又見に来なよ。科学者は戦火をさけて保護されていったのかも知れないな」との話を聞いた。特電波タイムス静岡支局の岡本禎夫さん（静岡市）からは、戦時中大井川線に乗って島田から大井川発電所を何回も往復した。「発電所に湯川博士がいらつしやつた？」と聞くと「私は朝永振一郎博士を見ました」と伺いました。その時はどうした理由かを確かめる事もしなかったのですが、「強力電波兵器」研究で点が線に繋がったように思えます。

今夏8月10日頃岡本さんより電話がありました。8月15日18時頃のSBSテレビ夕刊で「戦争の跡特集」で牛尾山をやるから見て下さいとグとの情報でした。さつそくメモして忘れない様にと気を付けた矢先、8月14日の静岡新聞夕刊一面に「島田で旧海軍研究、強力電波兵器」実験所跡初の発掘調査」の大々だしのもと記事が載りました。そして15日18時30分頃、当時の事を知っている岡本さんの元気の女を拜見致しました。

牛尾山でこの様な研究所があった事は知る人ぞ知るで私は「レーザー光線発射所」と聞いていたし、新たな見識を紹介出来たと思っています。なお、科学者の一部の人は島田市に会社をつくりエレクトロニクスなど先端科学の製品を世に

送り出したりしたという事です。(参考文献「新聞夕刊」)

情報通信の普及、発展に貢献

岡本 禎夫氏に

東海通信局長、表彰

前記事中の岡本さんを紹介します。長い間寄稿された渡邊實夫さんからの紹介で、ふる里通信の会員です。

去る6月3日、名古屋のキャッスルホテルで行われた「電波の日」情報通信月間記念式典で、当クラブ役員岡本禎夫氏(SBS社友)が東海総合通信局長から個人表彰を受賞しました。

受賞は、多年にわたる情報通信への普及、発展に貢献、最近10年間は静岡県電波適正利用推進協議会会長として電波環境

のワリーン化に尽力したことによるもの。現在も電波タイムス静岡支局長として活躍されています。

この表彰に対し岡本氏は「戦中の学徒動員で、東芝通信機から海軍技術研究所に配属され、戦後は、SBS

技術部一期生として入社、人生の

ほとんどは「電波界」と関連を持ち、電波関係者にお世話になって60年余を経て来た。これからも、電波界に恩返しのため活動に努めたい」と語っていました。「静岡県放クラブ第2号より」

「牛尾山」のこと

「強力電波兵器」の疎開先の第二海軍技術廠牛尾実験所のあった牛尾山のことをお知らせしたいと思います。



記念式典で高崎一郎局長から表彰を受ける岡本さん



何故、牛尾山と言われるかという点、昔、志太郡から伸びる山脈が大井川の方に突き出し長く伸び形が牛(志太郡の山)の尾のほうのような形だったので、名前からつき、別名駿河山とも言われたそうです。東海道(古道)が、現在より山側を通り西より掛川と日坂と志太郡と横岡(注)牛尾山と千葉山の道があったとありますから、昔は、大井川が、五和を通り、金谷と河原に、一路、焼津の方面に流れ、現在の志太、榛原のデルタ地形を造り出したそうです。

天正18年の「大井川の瀬督え」牛尾山へ伸びる半島を削って、大井川を駿河側に通し、五和に新田を築き、なお大井川下流の流路を定める大工事において、相賀、牛尾間を開鑿して大井川の流路を今に近い形にした。なお、当時の掛川城主山内一豊、駿府城主中村一氏が協力してこの大工事を成しとげた。とありますが、実際は、この二、三百年前より大井川は、島田側を通って、洪水時には、元の川(金谷側)を通ったりしていた。為、掛川藩は横岡・牛尾山間に堤を築き、駿府藩は、向谷に堤を築いて、流路を安定したという解釈もあり、す。横岡堤を別名山内堤ともいいます。

時代は変わって、現代、大井川の流路もコントロールされる事になり、立派な護岸堤も築かれましたが、牛尾山と相賀間の川幅が300mとあまりに狭い為、牛尾山の川に面する場所を150mほど削り、川幅を広げる工事が昨年より始まっており、国土交通省のこの工事名は、「大井川平成の

- この時代の駿・遠の主だった出来事
- 1575年(天正3)長篠の戦い、徳川家康、諏訪原城を陥落
 - 1589年(天正17)家康、遠の国で検地を行い、諸郷村にツカサの条規を定める
 - 1590年(天正18)豊臣秀吉、小山原の北条氏を攻め滅ぼす、「大井川の遊覧」
 - 1600年(慶長5)関ヶ原の戦い
- 天正18年の瀬督えに関わった豊臣系大名 —
- ※ 中村一氏、和泉岸和田より駿河一団を与えられ、14万5000石で駿府城に入る、大関検地実施、関ヶ原の戦い直前に死去。
 - ※ 山内一豊、近江長浜より5万石で「掛川城主」になった大関検地など精力的に領国支配をする、関ヶ原の戦いでは東軍につく、後石居は加増されたが、土佐浦戸へ転封となる。(江戸時代末期坂本竜馬の出身藩)

定期購読のお願い

このふる里通信は有料発行です。

1部 送料込 300円

皆様の定期購読がこの通信の発行を支えます。年間4回の発行を目指しております。そして目標の100号はもうすぐです。支えて下さった皆様のおかげです。

購読料が切れた方には郵便振替用紙を同封します。100号までの回数をめやすにお振込いただければ嬉しいです。又中止したい方もお知らせ下さい。

発行責任者 〒428-0313

静岡県榛原郡川根本町上長尾 859-6

小澤 節子

TEL 0547-56-0015

FAX 0547-56-0020

<http://furusatotsushin.yamanoha.com/>

暑い暑い夏もようやく終りを告げようとしています。まさにじりじりとした日射しが物皆焼きつくす、との威がありましたが、皆さんの祈はいかかだったでしょう。ふる里は雨が少しは降りますが、まとまった雨がありません。そうでなくては川面に流れの無い大井川は支流からの流れ

大改修」と銘打っており、その改修地に「第三海軍技術廠牛尾実験所」跡地もかかっているようです。昨年四月開通した新東名高速道路は丘陵地帯を通るため見晴らしも良く走りごちも良く、素晴らしいハイウェイです。島田金谷インターのすぐ近くに牛尾山を切割って道路があります。五十年ほど前、春の遠足で対岸カシワパラより五和の平野(大井川昔の川谷)をながめた事があります。一面、れんげ草のピンクの絨毯に感激しました。今はながめたら、屋根で埋まっているでしょう。牛尾山を開削し、川幅を広めた大井川はどの様な結果になるでしょう。又川根路へ車でいらっしやる時には対岸より牛尾山をご覧下さい。



富士山世界文化遺産・南アルプスエコパーク。二〇二〇年東京オリンピック開催と嬉しい話題が持ち切りで、将来が楽しみです。世界の人々が見ているのですから、東日本大震災の復興も早く完成しなければなりません。こわれたものを元どおりには無理でしょうが、安心して住らせる場を早くつくりたいですね。それにしても原子力関係のこわれた時の対応、何とかすかしのものではないでしょうか。まして核爆弾を戦争につかうなど、今一度戦争は絶対してはならないと誓いましょう。これからは季節もよくはり実の秋とります。

も届かず、所々流れがとたえます。水の流れない広い川原が、いつそう暑さを増させます。何とか豊かな流れと水辺の潤いをもよみがえらせたいと切に思うこの頃です。それで山や畑は美しい緑です。川根本町では十月六日町長選挙と町議会議員の選挙が行われます。すでに町長には複数の立候補者が新聞紙上に名乗りを上げ選挙になりそうなお配です。町議会議員の方もあちこちで名が上がりこちらも選挙になりそうです。昨年二年間強町長リコールでふる里はみだれ行政の停滞をまねき町議会は混乱の極みで、マスコミの餌食となり、平和な町は、全国につまりぬ事、名を轟かす事になってしまいました。とても残念な事でした。今度迎える二つの選挙は町民の意志によって町の将来が左右される大切な選挙とも言えます。リコールなどと町民に行く先を決めさせた事も、町民の力を消耗させ、やる気を無くした事も事実です。次回では選ばれる人々をご紹介できると思います。

